



香料などに利用されるハッカは戦前、北見地方を中心に北海道が世界シェアの約7割を占め、最大で約2万畝の栽培面積がありました。しかし、外国産の台頭などで衰退し、現在は地域の特産物としてオホーツク管内滝上町で約5畝、北見市で約2畝栽培されています。東海大学札幌キャンパスではハッカを題材に化学実験と産業史の講義を併せた授業で、科学や技術の意義を学んでいます。

ハッカはシソ科の多年草で、葉や茎に含まれる「リモネン」が清涼感の基です。リモネンが多いのが特徴の和種ハッカと、ペパーミントなどの洋種ハッカに分けられます。「和種ハッカが北海道で栽培されるようになったのは1966年（昭和41年）です。元道立北見農業試験場（現道立総合研究機構北見農業試験場）専門技術員の五十嵐龍夫さん（71）がまとめた「はつか栽培技術体系」などによる、1885年（明治18年）に山形県から八雲村（現渡島管内八雲町）に伝わって試作されたのが最初とされます。

リモネン結晶が容易に得られるため、水蒸気蒸留で精油を取り、それを冷やしてろ過すれば得られます。こう解説するのは東海大学札幌キャンパス生物学部教授で基礎化学実験を教える和泉光則さん（60）です。

## 98 ハッカ 北見に工場 世界へ販路

### 戦後は外国産台頭 小規模に

96年に永山村（現旭川市）から湧別村（現オホーツク管内湧別町）に移植され、現在の北見市などオホーツク管内に広がりました。理由は①栽培に適した日照・少雨の気候に交通が不便な地域でも精油にすると輸送が容易など。滝上町のハッカ農家出身でもある五十嵐さんは「他の作物よりも収入が多く、一度植えると手間が少ないのも理由でしょう。実際、父は刈り取りなどの繁忙期以外はハッカ以外の仕事に精を出せた」と振り返ります。

道内の栽培面積は1907年（明治40年）に2062畝だったのが、30年（昭和5年）には約6・7倍の1万3804畝に。しかし精油の価格は、本州の大手商人の意のまま安価でした。「もんべつに生きて、わたしのむかし語り」で聞き書きを担当した紋別市在住の A さん（74）は当時の農家の声をこう記録しています。「値段は相場が動いていて、仲買の人が夜中にやってきて『いい値段だから売らんか』と言って、歩いて回るような調子でした。こっちもなるべく高く売りたいですから真剣勝負です」

こうした弊害を乗り越え、北見地方が一大産地に発展したのが、34年のホクレン北見薄荷工場の開業です。北見ハッカ記念館と薄荷蒸溜館の館長の山口淳一さん（71）は「加工施設や輸送能力を持ったことで、ハッカを農民の手に取り戻した意義は大きい」と語ります。同年、「HOKU」

東海大札幌の和泉さんは担当する基礎化学実験の授業でこうしたハッカ産業史を講義した上で、和種ハッカから精油を取り、リモネン結晶を精製する実験を行っています。「ハッカの生産は天然素材から目的物を取り出し精製する典型的な化学的プロセス。それが身近な産業にどう生かされてきたかを知り、先人の苦労と工夫を想像してほしい」と話します。

人や社会を思いやる豊かな感性を育むことが、科学と技術の将来にとって大事なのでしよう。



蒸留後、蒸留釜から取り出されたハッカの葉や茎 = 9月（滝上町提供）



年 組 名前

---

# 道新で ワークシート

【1】 地図に示されている地名は、どのような場所ですか。  
適当な地名を、それぞれ指定された数で書きなさい。

① 北海道で最初にハッカが栽培された場所（1つ）

② 現在でもハッカが栽培されている場所（2つ）

③ オホーツク管内でハッカの栽培が広がる起点となった場所（1つ）

【2】 新聞記事の文体の説明として適当なものを次から選び記号で答えなさい。

ア 新聞記事は一般的に常体で書かれ、この記事も常体で書かれている。

イ 新聞記事は一般的に敬体で書かれ、この記事も敬体で書かれている。

ウ 新聞記事は一般的に常体で書かれるが、この記事は敬体で書かれている。

エ 新聞記事は一般的に敬体で書かれるが、この記事は常体で書かれている。